

御代がわりを前に

平成二十五年に伊勢神宮で式年遷宮しきねんせんぐうの行事が執り行なわれた。テレビや新聞でこの行事のことがしきりに伝えられ、関心を促された。二十年ごとに内宮ないくうと外宮げくうの二つの正殿、一四の別宮を造り変え、神座を移すというしきたりである。持統天皇治世の西暦六九〇年に始まったといわれるから、平成二十五年の遷宮は六二回目、実に千三百年の歴史がある。

いったい、人間はどうしてこんな厄介やくがいなことをやりつづけるのか。あゝそうか。これは日本の歴史の連続性を再確認するための営為なのであらうと気づかされ得心した。日本の歴史が大逆、動乱、侵略などによって深刻な危機に貶おとしめられたのであれば、こんなしきたりが千三百年にもわたって継続するはずがない。いや、こうしたしきたりを何としても守りつづけようという民衆の意思が、日本の歴史を連続的なものとして継承させてきた、といった方がいいのかも知れない。

御代みよがわりが近づいてきた。明治の改元以来、「一世二元制」が採用され、明治、大正、昭和、そ

渡辺利夫わたなべ としお（拓殖大学学事顧問）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

して平成までが過ぎ去らうとしている。一世一元制は、天皇家の血脈が絶えることなく連綿れんめんとして紡がれてきたという歴史の真実を、私どもによく分からせるための優れた「制度設計」なのであらう。祖先があり、曾祖父母があり、祖父母があつて、両親、そして自分が在るといふ血脈の連続性を、天皇家の血脈の連続性の中に投影して自分の血脈のありように私どもを覚醒せきせいさせる、そういう「効用」が一世一元制の中にはあるのだらうと思う。

そういえば、明治維新以来のさまざまな出来事を考える場合、西暦で考えようとしても私の頭の中には具体像が浮かんでこない。維新以前の歴史については逆に西暦で考えてしまう。一世一元制は人間の時間の思考枠を変えてしまうほどに強い力があるのだ、と改めて思われる。歴史意識といったら強すぎるけれども、そうした感覚を人間に呼び覚ますのに、一世一元制は秀逸しゅういつなる制度なのであらう。教科書などでは日本史の年号を西暦で記すことが一般的だが、これは再考の余地大いにあり、ではないか。